

小林隆児著

『自閉症とことばの成り立ち』

関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界



ミネルヴァ書房  
本体二八〇〇円

評者・村田豊久

自閉症への臨床的かわりを絶え間なく続け、関係発達臨床という独自の領域を築きあげた著者が、本書ではことばの成り立ちという、自閉症の成因を考える上でもっとも重要な問題に真正面から取り組んで得られた成果を報告した。著者自身かなりの自信をもってまとめたもので、著者の臨床家としての迫力を如実にあらわした快心の書といえよう。

著者は三〇年前、自閉症の療育に携わるようになったときから、自閉症の子どもの理解しにくいことばや行動を、それはその子どもにとってどんな意味があるのかをわかってやりたいという強い衝動に駆られてきた人であった。どうしていつも同じことばかり繰り返して言うのか、どうしていつも手をひらひらさせて手指の間から周りをみつめるのか、それはその子がそうしなくてはならない事情があるはずだ、その意味をわかってやらないと治療も

発達支援も始まらないのではないかと。それは子どもの発達を客観的に評価したり、平均からの隔たりを遅れと見なしたり、劣ったところを個体能力の障害の見なし、訓練や学習によって平均に近づけようとするそれまでの児童精神医学や障害児臨床がとってきた方法論とは、かなり異なるものだった。

自閉症のわかりにくい動作、行動、ことばなどの理解は、彼らが、いま、ここでは何を感じ、求めているのかを、彼らのところに身を寄せ、同じ世界に存在し始めて初めて可能になる。当然のことながら、ヒトが人間として発達していくには、まず、まわりの世界との関係、養育者との関係が作られなくてはならないこと、その関係のありようがいかに発達するかでさまざまな障害も起こってくるのが明らかとなってきた。その過程で著者が模索し、発展させてきた臨床手法が関係発達臨床

床として結実したのである。

この関係発達臨床の体験から、自閉症では生来的な知覚過敏のため関係性が進展しにくく、原初的コミュニケーションの段階で足踏みしていると説く。そこでは情動と知覚や認知との分化も起こりにくく、いつまでも原初的知覚様態が支配的となつている。そこを抜け出すには、子どもは養育者のかかわりによって安心できる体験をもち、養育者とのかわりを通じてまわりの世界を知る手立てを身につけていかねばならない。異常な知覚過敏のため、まわりからの働きかけを自分に侵入してくる危険なものとして、迫害不安を抱きやすい自閉症に、養育者が一緒になつてそこを乗り越え、さらに新たな関係性をもてるよう援助するのが関係発達臨床の要諦である。

本書ではことばが成り立っていない自閉症、ことばの発達が足踏みし、これまで記述されてきた自閉症の言語病理像を呈している子どもたちへの関係発達臨床の状況が鮮明に叙述され、ことばが誕生してくる背景、すなわち関係性のもと生じ、それを深めていくものとしてのことばがあることが教えられる。多くの子ども、母子関係の具体的な姿が描写され、そのいずれもが印象的である。

早期の関係性の未解決さに関連して、

大きくなつた子どもでもそこに焦点を当てた働きかけがやはり必要なか、また有効なのかという疑問もわく。著者はそのことをくわしくは説明しない。当然と考へてのことであろう。というのは、本書では青年期の自閉症、成人の自閉症が数多く叙述され、ことばをもたない方々、重い行動障害、強迫症状や途絶などの症状を呈している方々への関係発達臨床の様子が報告されている。そして、著者や援助者（臨床指導員）の根気強い接近に、受容されたという気持ちをもつと、どの人も見違えるようにかわり、またことばの発達を見るのであった。著者はどのように重度の自閉症でも、人に認められたい、かまってもらいたい、甘えたい、という欲求を抱いていると確信しているようだ。本書を読むとそれはやはり本当だろうと思つた。

本書はいろいろのことを教えてくれた。自閉症の臨床のことはもちろん、ことばの誕生と発達についてのこと。一般の育児においてもっとも重要なこととは何かということ。そして関係発達臨床は、すべての疾患（統合失調症も含めて）や障害の理解と治療にも役立つようになるのではないかと思つた。

（むらた・とよひさ／西南学院大学教授）